

春のうれひ

小松理英子 北海道

裸木にくまなく雪がはりついて白一色の並木道になる  
陽の射せる机の上を雪つぶのかげがうへへのぼつてゆけり  
雪とけて洪水起きるところあり 春には春のうれひがありぬ  
もしかして未来の人類くちもとにマスクのやうな皮膜あるかも  
パン焼けるにほひただよふお茶の間に爆撃映像とびこんでくる

鉄に戻りて

児玉かつ 宮城

寒きこと朝言ひ昼言ひ夜も言ひひと日過ぎたり昨日のやうに  
噛み切れぬトマトの皮が上顎にへばりつくとき救急車過ぐ  
遠雷のきこゆる夕べ手掴みにシシヤモ食ひつつけものめくなり  
陽に照りし公園遊具夜の雨でひんやりと鉄に戻りてをらむ  
黙禱の二時四十六分に間に合はせむと買物いそぐ

うぶすな

三浦さつき 千葉

愛媛県新居郡神郷村松神子 地名も生家もいまはもう無い  
垣生山や長岩橋や樋の口や地霊ずいしよにやどるうぶすな  
出郷の仔細おぼろになりたれど父母の指図のまま離郷せり  
駅まへの永久堂はどうかしら栗まんとときどき買ったあの店  
通院のバスさへ旅のきぶんにて窓をながるる景色まばゆし

生きてゆく理由

片岡

絢

神奈川

この曲は（船が沈没する映画）さうだつた『タイタニック』の曲だ  
疲れたるわれにとどめを刺してくるカフェのセリーヌ・ディオンの声が  
炒めてるフライパンから飛び出したキャベツを拾ふ気力さへない  
新築の間取り図を見て子のへやの位置だけ決めてそのチラシ棄つ  
ただひとりの母であること 生きてゆく理由はいまはそれだけでよい

骨

近藤 哲 夫

神奈川

大森の貝塚出土の骨ゆたかうみがめ、かりがね、むじなが交じる  
餌とりあひ金黒羽白をつきとばす真鯉の口の齧あかくおほきく  
最大限マックスにベルを響動ませわが脇をはしり抜けたり自転車老女  
図書館に備へられたる除菌機にわが身しのばせみそぎ祓す  
「あの一茶はうちの親戚」同級の小林澄江がたしか言つてた

道白し

四野宮 和 之 東京

二台とも掘削止めて多摩川の春のまひるのみづおとひびく  
長岡で食べてからです晩酌のつど小皿には（柿の種）あり  
わがならび七軒ありて道白し四軒にある杏子の散りて

（桃の咲く丘）の柊二のうた載りぬ震災十一年目の朝刊

褐色の髪の毛の婦人がカフェで見る待ち受け画面のゼレンスキーを

落ち椿

河合育子 愛知

まなざしを残し椿の花落ちぬ兵士のいのちかるくなる春  
（爆撃）の言葉の中の戦場のひびき戦車が重く走り来  
首ごとりごり転がる落ち椿侵攻の死者増えゆくばかり  
砲撃的まじによるしき原発と知る震撼の春昼暗し  
梅咲けど三月寒し日々まぶた薄くしながら待つ陽の温み

みちのく忌

藤田倫夫 三重

「引き算はかなしい」と言ふ小一の短歌うたの沁み来るけふみちのく忌  
フクシマの林檎を売らぬスーパ一のこのはなやぎに馴染めず出で来  
のほほんとする人には聞えない除染なき森のミミズらの声  
ほのぼのと灯れるやうな町の名よされど見えない（双葉）の将来は  
耐用の（規制）はづされまたうごくゲンパツの機器音なく軋む

歳月は

藤岡成子 兵庫

すみわたる空飛ぶ花粉の戦士らがいまわたくしの目を攻撃す  
やさしさの集合体のやうな雲、ほうやれほうほ母さんこひし  
塞ぎ込む馬鹿なハートに隙間なく青空つめて会議に向かふ  
慟哭せし夫の死さへもなつかしい歳月は老いと悟りを呉れつ  
甘藍を食べつくしたる鴨ひよが鳴くロシアの侵撃いまだに止まらず

裁ち鋏

池下寿子 和歌山

タンポポの綿毛ふうーはやめませう庭に畑に黄の花ふえて  
キラクターの布地に柄の上下ありパズルのごとく型紙を置く  
グサグサと布地切りゆく裁ちばさみ布の運命決めてゆく音  
型紙の通りに裁ちて布地はも手提げカバンになる使命おぶ  
裁ち鋏は嫁に持ちきて四十年必殺仕事人のごとくはたらく

仮面舞踏会

宮西史子 香川

庭先のセンサーライト点灯し思はずわがめぐり明るむ  
オオバンの二つつういと現はれて仮面舞踏会の始まり  
金満家なるごとき貌そと見せてクロガネモチは朱き実ささぐ  
エストロゲン多しとセーブする菓飲まされました乳癌のあと  
聞き捨てにならぬいくつか聞き捨てて半信半疑オベ免れぬ

よく晴れて

吉里幸雄 福岡

丈ひくくうすむらさきの寒<sup>か</sup>あやめ枯れ立つ草に溺<sup>か</sup>れて咲けり  
左眼の視力はまだありうれしくもげにこまごまと仏の座みゆ  
よく晴れてなにか嬉しくへ魚沼のお米を今朝は多めに撒きぬ  
宵びなのちらしもすましも思ひ出よ小さな朱蠟ひとり灯して  
白木蓮ほのと染まれる朝の空 念<sup>おも</sup>へど遠しよ噫ウクライナ